

何にもなかった

四月三日	金曜日	何にもなかった
四月四日	土曜日	何にもなかった
四月五日	日曜日	何にもなかった

あれから、ずっと、この三日間、僕の頭は空っぽになった。

この間の四月二日の夕方、気が付くと、僕は、そのまま、中書島で電車を降り、宇治線に乗換え、観月橋を歩いていった。

何にもなかった。
何にも行動起こせなかった。

家に帰っても、僕はこの週末、ぼーとして、生きた屍（しかばね）だった。ただ、出されるままにめしを食い、寝た。

夢を見ていた。

地上のすべてを赤く染めて、太陽が西の山に沈もうとしていた。冷たい風が吹き、凍えるような突風が町かどの人の家路を急がせた。日が短い冬で、すぐにまわりは暗くなった。うす暗い小さな古びた家の中で、二人の幼い兄弟があどけない遊びに熱中していた。二人の小さい耳は、大きな、さびた鉄瓶からでる低く重い、澄んだ音に聞きいらっていた。その鉄瓶を棒でたたいたびに出る音に二人はお互いの顔を見てケタケタと笑った。その音はその家の